

Title	19世紀ハンガリー言語改革と2つの正語主義
Author(s)	岡本, 真理
Citation	大阪外国語大学論集. 18 p.119-p.143
Issue Date	1998-03-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79751
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

19世紀ハンガリー言語改革と2つの正語主義

岡 本 真 理

Кét ortológia a XIX. századi magyar nyelvújításban

OKAMOTO Mari

Dolgozatom célja az, hogy a nyelvi mozgalommal kapcsolatos viták vizsgálata által jellemezze a magyar művelődés történetének egy kiemelkedő időszakát, azaz a felvilágosodás korától kezdődő mintegy százéves periódust.

A XIX. század elejének nyelvújítási mozgalma a teljes magyar értelmiséget két táborba osztotta. A népnyelvet tökéletesnek minősítő ortológusok hevesen ellenálltak a nyelvújítást előmozdítani kívánó neológusoknak. A Tudós Társaság (Akadémia) létrehozása, illetve annak nyelvművelő tevékenysége maradandóvá tette a nyelvújítás eredményeit. A szabadságharc bukása utáni politikai németesítés azonban szélsőségesse tette a nyelvújítást, ez pedig egy új ortológia jelentkezését váltotta ki. A század második felének új ortológusai a "Nyelvőr" c. folyóirat megindításával lendültek ellentámadásba. Elsősorban nekik köszönhető, hogy a nyelvújítás által teremtett számtalan formából csak a jó és nyelvileg helyes szóalakok váltak közkinccsé.

A fenti két ortológiát összevetve mind különbségeket, mind hasonlóságokat találunk. A legfőbb hasonlóság abból következik, hogy mindkét ortológia nyelvfejlődési felfogásának alapjául a kortárs német nyelvfilozófia fogalomrendszere szolgált. Az új és a régi ortológia alapvető különbsége módszertani jellegű, ami abból következik, hogy két iskola jelentkezése közé ékelődik a modern történeti nyelvtudomány születése.

0.はじめに

1. ハンガリー啓蒙期の時代的特徴

1. 1 文学史における啓蒙期の位置づけ

1. 2 啓蒙期が目指したもの

2. 言語改革論争

2. 1 言語改革のはじまり

- 2. 2 正語派と新語派の言語観
- 2. 3 論争の展開
- 2. 4 ケルチェイの新語主義
- 2. 5 論争の終結——「正語派と新語派」論文
- 3. 過渡期としての「革命」と「妥協」
 - 3. 1 改革期の役割
 - 3. 2 「革命」から「妥協」にいたるまでの言語状況
- 4. 言語改革批判——新正語派の反撃
 - 4. 1 行き過ぎた新語主義
 - 4. 2 サルヴァシュと『語警人』のはじまり
 - 4. 3 『語警人』の活動と新語派の反論
 - 4. 4 新正語派のもたらした影響
- 5. むすびに代えて

0. はじめに

本論文では、国民国家形成期のハンガリーにおける言語改革(nyelvújítás)に関する諸論争をテーマとした。言語改革は、古今東西にみられる民族言語の認識運動で、外国語の排斥・純化運動(purism)や語彙の造成(word formation)、標準語の創出(standardisation)などに特徴づけられる。⁽¹⁾ヨーロッパの後進地域であった中東欧諸民族においては、ラテン語、フランス語、ドイツ語などの何重もの層をなした政治・社会・文化的優勢言語を克服し、民族言語を発展させる試みとして、18世紀末に始動した。⁽²⁾ハンガリーにおいては、当時のほとんどの知識人が新語の創造に情熱を注いだ新語主義(neológia)とそれに辛辣な批判を浴びせた正語主義(ortológia)⁽³⁾の二つの陣営に分かれ、何十年にもわたって激しい論争を巻き起こした。本論文の目的は、それらの論争を通して第一に当時のハンガリーにおける二つの対峙する言語観を社会的状況との関連において明らかにすること、第二に言語改革を通じて二度現れた正語主義を比較検討することである。

ここで扱った時代は2つに分けられる。第一は、18世紀末の西欧啓蒙主義やロマン主義の影響で民族的自意識が芽生えた啓蒙期の始まりから、民族主義の絶頂となった1848年革命に至る過程をなす改革期であり、これは論文の前半で議論される言語改革(新語派と正語派)の時代である。第二は、革命の失敗、政治的反動化から「妥協」を経て19世紀末の経済的繁栄を迎えるまでの時期で、これは論文の後半、つまり言語改革批判(新語派と新正語派)の時代である。最後に、この2つの時代にそれぞれ現れた正語主義の共通点、相違点について検討する。

1. ハンガリー啓蒙期の時代的特徴

1. 1 文学史における啓蒙期の位置づけ

ハンガリーの精神文化史において、いわゆる啓蒙期 (felvilágosodás kora) とよばれる時期を 1772 年をもって始まりとする見方は、かなり長い間伝統となってきた。⁽⁴⁾ この年は、マリア・テレジアの組織したハンガリー人近衛兵部隊の一員であったベシェニェイ (Bessenyei György) が最初に詩集を出版した年であり、それはかれが代表する近衛兵文士 (testőrtörök) とよばれたウィーンのハンガリー貴族青年たちの中で萌芽した新思想——つまりフランスの啓蒙主義思想の影響を受けた反キリスト教的合理主義、近代的市民国家の理念や民族意識の覚醒、民族語育成の重要性——が初めて宣言された年であるといえることができる。かれら近衛兵文士たちは、中欧の封建的絶対君主国家ハプスブルグ帝国の首都であり、しかもハンガリーと比べはるかに西欧からの文化的影響を享受しやすい都市ウィーンに暮らしていた。そしてまた、かれらの君主は啓蒙思想の取り入れに熱心なマリア・テレジアやその息子ヨーゼフ二世であった。しかしウィーンの宮廷における啓蒙思想の目的は、フランスにおけるように市民革命へとつながる思想的準備のためであるどころか、その正反対に、プロイセンのフリードリヒ二世と同様、啓蒙主義という教養的武装によって自らの君主国家を強化することであった。このように、ハンガリー貴族青年たちは、支配者自らによって啓蒙思想を奨励されながら、その真の理想の追求を阻止されるという、奇妙に逆説的な状況にあった。ハンガリーをはじめ、中東欧の啓蒙主義が西欧に比べ、著しく精神生活、ひいては文学・言語活動の領域に集約されたのは、こういった頑強な保守政治の中で進歩的思想を生き延びさせるためのやむを得ない方策であったといえる。

18 世紀の最後の四半世紀にはじまるハンガリー精神史上の新しい時代を、ウィーンをもって始まりと論じるのは、いささか荒削りであろう。セルブが「すべての自由解放運動と同様、貴族階級による啓蒙主義の最初の軌跡もエルデーイにおいてみられる」⁽⁵⁾ というように、たとえ運動の大きな波をかき立てたのがウィーンの貴族たちだったとしても、その地下水脈は 17—18 世紀の世紀転換期のエルデーイ (現ルーマニア北西部、トランシルヴァニア地方のハンガリー語名。当時ハンガリー貴族の支配による独立公国であった) から湧き出ている。サトマール和によりハプスブルグに編入されたこの公国は、それまでのオスマン・トルコの貢納国でありながら政治的、宗教的、そして言語文化的自治を保証されていた時代から見れば、ウィーンに近づいたことによりいっそうフランスから遠のいたのであった。エルデーイの貴族階級による自伝文学 (memoárirodalom) は、公国の存在の危機に瀕してはじめて精神的開花を果たしたことを示し、その消滅の後にはハンガリー文学は 18 世紀中を通して 2 つの方向に分断されるのである。すなわち一つは民族的感情や民族独立の理想を表現する詩文学で、それは名もなく文字にさえ現れない口承文学として語り継がれ、もう一つの方向は 2—30 年の沈黙の後、外国文学 (ラテン、フランス、ドイツ) の模倣を始める。ラーコーツィ 2 世の対ハプスブルグ戦争の大敗 (1711 年) から先述の 1772 年までを、ハンガリー文学史が非民族的時代 (nemzetietlen)、または無価値

の時代(méltatlan)と形容してきたのは、このようなエルデーイの自由な伝統の消失とドイツ語文化への従属を嘆いた自己憐憫の表出であり、上流貴族たちによるハンガリー語離れやラテン語回帰に対する自己批判の現れである。しかし、その文学の停滞期でさえも文学発達史の観点から論じれば、ホルヴァートのいうように「過渡期」であり、「国民文学の準備期間」なのである。⁽⁶⁾

話をウィーンに戻すと、ベシェニエイら宮廷の若き近衛兵の多くは中流貴族や領地を持たない下流貴族の出身であった。マリア・テレジアはRatio Educationis⁽⁷⁾で初等教育の義務化を行った偉大な教育改革者であるが、この点でハンガリー下流貴族により高度な教育を受ける場を提供した人物でもある。⁽⁸⁾ 片田舎から上京した彼らは、華やかな社交界やウィーンのご婦人たちとの恋愛に刺激を受けただけでなく、まもなくラテン語、フランス語、英語などを習得し、ヴォルテールやディドロを読み、ロックの経験主義を学ぶ。ベシェニエイがウィーン時代にひたすら考えていたのは、フランス啓蒙主義にならった国民、つまりあらゆる階級の人々が受けられる教育の実現、それも自分の母語による教育の実現である。ハンガリー啓蒙期の始まりとみなされる1772年以降、ちょうど十年にわたるウィーン滞在中、ベシェニエイは次第に政治色を強めた著作を次々と発表し、そのウィーンでの最後の作品となった『あるハンガリー学術協会設立に向けてのささやかな試み』(Egy magyar társaság iránt való jámbor szándék)⁽⁹⁾では「学問は近く国中のすべての階級の人々に広まるだろう」と予言し、「ああ、なんと多くの才能が埋もれていることか！それも生まれ持った母語で培われたなら、祖国にもっともっと幸福をもたらすことができよう！」と母語——すなわちハンガリー語——によるすべての人への学問と教養の普及の必要性を力説している。

ベシェニエイによって提示されたハンガリー語の学問、教育の育成を行う学術組織の設立案が実現されるまでには、しかしまだ半世紀近い時を待たねばならなかった。狭義の啓蒙期がハンガリー・ジャコバン党事件の起こる1795年までとされるのは、70年代から高まり続けた政治的・文学的・言語的ハンガリー化運動がこの年をもって一斉に当局によって弾圧され、その後の反動体制、検閲の強化によってハンガリー精神生活は20年近い沈黙を余儀なくされたからである。⁽¹⁰⁾ 世紀末すでに文学界の指導的立場にあったカジンツィ(Kazinczy Ferenc)が、この事件によって7年に及ぶ拘留を受けたことが、この空白を象徴している。その後、解放された彼をとりまく言語改革の一連の論争を経て、ロマン派詩人たちによってようやく文学が真の開花を見るのは1830—40年代の「改革期」(reformkor)であり、「諸民族の春」と形容される1848年革命の前夜なのである。このように、啓蒙期は革命と結びついて絶頂期を生むロマン主義の準備段階というべき役割を担い、自国の言語文化への自覚を急速に強めた時代であった。

1. 2 啓蒙期が目指したもの

では、上に示した言語文学運動の2つの頂点のうちの前者にあたる啓蒙期に、反権力的知識人たちが目指したハンガリー語の改革とは具体的には何だったのだろうか。ベシェニエイにしろカ

ジンツィにしる、ハンガリー語育成を目指した啓蒙期の文人たちがまずはじめに必要な性を痛感していたのは、第一にハンガリー語の共通文語の確立、第二に外国語の排斥、ハンガリー語の純化であった。この点、ヨーロッパの国民語、国家語の成立過程は多かれ少なかれ共通しており、ただ時代のずれがあるとコシャーリは指摘している。つまり、チョーサー、ウィクリフの時代から標準化が進んだ英語や、コルネイユ、ラシーヌなど早くから国民文学の素地を持ち、17世紀末にアカデミーにおいて精緻に整えられたフランス語が第一のレベルとすると、18世紀にそれを追うドイツ語が第二のレベル、そして第三のレベルとして18世紀末の東欧の諸民族が続くのである。⁽¹¹⁾ しかし、かれらはこの共通の言語的規範に、自分の生まれ育った地方の方言を最も美しいものとして採用しようとしたために、後に見るようにドゥナーントゥール地方などの識者らと論争を激化する一因となってしまったことは否めない。⁽¹²⁾ また、民族言語の育成のためにはしかるべき学術機関の整備と辞書の編纂事業が不可欠であった。学術協会の構想は、前述のベシェニエイにおいてはじめて明らかにされるが、彼以外に言語学者ヴェルシェギも1793年『準備綱領(Pro ludium)』で学術協会によるハンガリー語辞書編纂と文法書作成についての構想を述べている。辞書については、すでに1780年代に幾つかの辞書計画が提出され、⁽¹³⁾ やがて80—90年代前半にかけて、地理学・医学・物理学・農業などの専門別辞書が次々と作られた。また、ハンガリー語の学問と教育の育成を目的にした協会がペシュトを先頭にジェールやカッシャ(現在のスロヴァキアの都市コシツェ)などハンガリーの各地にできた。

以上が言語改革の論争をとりまく時代的背景である。先述のように、新語派・正語派に分かれた言語論争は、狭義の啓蒙期を過ぎた1810—20年代に頂点を迎える。次章では、誰がどのように言語改革にとりかかり、正語派の反対はどこに端を発したのか、そして両派の言語観を言語改革論争の展開を追いながら詳しく検討してみようと思う。

2. 言語改革論争

2. 1 言語改革のはじまり

18世紀末のハンガリーにおける文学活動の状況は、西欧の啓蒙主義に触れ、ハンガリー語の育成・発展への意識を高めた若い教養人らにとっては、嘆かわしいものであった。ハンガリーにおいてははまだラテン語・ドイツ語が政治行政のみならず、文化的領域においても支配的であった。それは、啓蒙君主ヨーゼフ二世の治世になって、官庁・高等教育におけるドイツ語使用の義務化(1784年)によって、さらに強められた。出版事情にしても、例えばブダの大学出版局では19世紀初頭においても、その全出版物のうち、ハンガリー語によるものはわずか12%にすぎなかった。⁽¹⁴⁾ このようなハンガリーの言語状況を憂う若きカジンツィは1787年パローティ(Baróti Szabó David)、バチャーニ(Batsányi János)と三人の共同編集により、初のハンガリー語による文学雑誌『マジャル・ムゼウム』(Magyar Museum)を刊行した。間もなく、バチャーニとの仲違いにより、カジンツィは『マジャル・ムゼウム』を離れ、独自に新たな雑誌『オルフェ

ウス』(Orpheus)を手がけることになるが、いずれにせよ、かれはハンガリー・ジャコバン党事件とそれに続く7年の牢獄生活を送る前は、翻訳・批評活動を通してハンガリー・ナショナリズムを高揚させる役目を担っていた。

言語改革という、ハンガリー語そのものの洗練、整備にカジンツィが大きな関心を寄せるようになるのは、19世紀に入り、拘留を解かれ文学界へ復帰してからである。文学者としてハンガリー語の改革に取り組み始めた彼が、文体など言語の美学的要素に関心の中心に置くようになるのは自然なことであった。言語の性質そのものを問いただした正語派と、その論点のずれが起きたのも当然であろう。それを詳しく見る前に、言語改革の出発点について述べる必要がある。

一連の言語改革運動の流れは、1780年刊行された初のハンガリー語新聞『マジャル報道』(Magyar Hírmondó)に端を発した。この新聞は、主に外国の新聞からの翻訳記事を掲載したので、おのずとそれまでのハンガリー語に欠けている新しい概念を表現する語彙を創作する必要性に迫られた。この新聞の発行によって、それまではほんの一部の識者の間でしか関心がもたれなかった言語改革の試みが広く一般世間に知れ渡るようになっただけでなく、紙面で創作語彙を繰り返し使用することによって、それはやがて読者層に流布し定着することとなる。初代編集長ラート(Rát Mátyás)の時代から大胆な語彙創作は始まったが、1784年から編集に携わったのちの偉大な文法学者、歴史言語学者レーヴァイ(Révai Miklós)は、新聞の発行部数を大幅にのばし、自ら新語を創作しているが、彼の後に続く編集長バルツァファルヴィ(Barczafalvi Szabó Dávid)のあまりに急進的な語彙創作には目をつぶっていられなかったらしい。レーヴァイは新語派の運動に賛成ではあったが、あまりに無節操な創作の洪水には厳しく反対している。それは、世紀転換後文法研究ひとすじに没頭していくレーヴァイにとっては当然の態度である。新語派に対立し、みずから正語派を名乗り出る一派が、主に言語学者によって成っていたのは、言語の法則性——つまり文法——を著しく無視した過激な改革を黙って見過ごせなかったからである。正語派は、バルツァファルヴィに代表される過激な言語改革にたいし、その行為を人為的で奇異な語彙創作によるハンガリー語破壊運動だと批判し、両派の対立は深まっていく。

2. 2 正語派と新語派の言語観

では、正語派と新語派それぞれの言語観とはどのようなものであったのだろうか。新語派がハンガリー語を磨き高めようとする志のもとに活動する作家や詩人らで成っていたのにたいし、正語派は学問としての言語を扱う学者らに代表されていた。とくに「デブレツェン文法」派は辛辣に言語改革を批判した。⁽¹⁵⁾ 彼らにとっては、新語派がすでに日常語に定着した外来語を排除して、代わりに故意に捻出した慣れない語彙を持ち込むさまは、ただ無意味で余計なことであった。逆に、そのような不自然な翻訳を試みることで、むしろハンガリー語の純粋さが損なわれると考えた。正語派の言語観とはすなわち、言語はそれ内部ではあらゆる変化が起こりうるが、それは言語そのものへの人間(話者)の意識が介入しない、閉じられた内的法則の中で発生することであ

り、外的な影響（意図的な言語操作）であってはいらない、というものである。また、かれらは本当の純粋な言語は民衆の口から発されることばであり、知的特権階級である文人の創作によって伝統や慣習から離反したことばではない、と考えた。どんな崇高な概念でも民衆のことばで表現できるし、民衆が簡単に理解できないようなことばはよいハンガリー語とはいえない、とした。このような正語派の言語観は、民衆の言語にたいする絶対的な信頼、いいかえれば言語の自然な発展法則と人類の精神史の発展にたいする寛大な肯定に裏打ちされていた。この考え方は、ドイツのロマン派の言語研究の影響を多大に受けていることを物語っている。前述のデブレツェン文法派や時代を代表する言語学者ヴェルシェギ(Verseggy Ferenc)は以上のような意味で正語派であった。後者はまた、のちに言語改革の中心人物として文学界を君臨するカジンツィによっても正語派の代表格とみなされるほどであった。先述のレーヴァイも、『マジャル報道』編集者として活躍した頃は新語派であったものの、後年文法書を編み出すころにはやはり正語派の立場をとっていた。

しかし、正語派の論評はかならずしも一致していたわけではない。たとえばレーヴァイとヴェルシェギの二人の文法家のあいだには言語改革論争とは別に、とくに正書法に関する激しい論争があった。⁽¹⁶⁾ それについてここで詳しく述べる余地はないが、かれら二人は言語の起源や文法研究の観点において対照的な思想をもっていたことが、論争を生んだ原因であった。ヴェルシェギは言語の起源についてはヘルダーの言語観から大きな影響を受け、言語神授説を否定し、ルソー的な人間起源論を支持した。また、文法研究ではドイツの文法学者アーデルングを師と仰ぎ、言語は発生以来たえず完成へと向かって発展しているので、古い言語の研究ではなく、今日の言語、それも庶民の話すことばを研究するべきとした。⁽¹⁷⁾ それは、歴史主義にもとづく文法家レーヴァイが言語神授説を固持し、衰退しつつある今日の言語ではなく、過去の完全な言語を研究すべきとしたのと対照的であった。それゆえ、両者の新語派批判の論点もかなりずれたものであった。共時的言語、庶民の慣習に生きる言語使用の現実を尊重するヴェルシェギは、新語派が死語となった古いハンガリー語の語彙をよみがえらせ、そこからさまざまな派生語彙を創作するのに対して、強く反発した。古い言語を絶対的に評価したレーヴァイは、節操ない語いじりには反感を示したものの、そのような古い語幹の復活にはむしろ寛容であった。

一方、新語派の運動は、文学的創作の領域で活躍する詩人や作家らによって展開された。文学の領域においては、正語派がこだわった学問的、理論的制限は完全に無視された。かれらは言語の慣習や法則にとらわれず、言語の最重要な法則は慣習ではなく、理想を追求する創作にあると考えた。ことばをあるべき姿へと変貌させ、発展させることが詩人であり、作家である新語派の人々の使命であった。言語を純粋に詩人としての立場からとらえたロマン派詩人チョコナイ(Csokonai Vitéz Mihály)の「ことばを新しくするのは、詩人と詩人の勇気をもった精神のみがなせるわざ」⁽¹⁸⁾ ということばは、言語の法則や慣習の呪縛から自らを解放した美的創造性あふれる詩人としての自覚を表現しており、ハンガリー語をより豊かに洗練させ、庶民を導くのは

言語学者ではなく作家であってこそできる任務なのだという宣言ともいえる。カジンツィは先述のように、投獄前はおもに雑誌刊行と翻訳活動を通して、文体の改良、その美的追求を主要な関心事としていたが、1802年頃から言語改革の問題をめぐるデプレツェン派と対立するようになる。そして1805年には、新語派として言語改革運動にのりだす決意を固め、次のように書いている。「こんなふうになるだろうか、かつて誰かがこんなふうにいったらだろうか、というのは問題ではない。そうではなく、わたしのことばが優雅で力強く新しい響きをもったことばとなるべく、わたしはこんなふうになれるだろうか、というのが問題なのです。そういうわけで、わたしは新語派の人間です。そして、そうあらねば、と思っているのです。」(下線は筆者による)⁽¹⁹⁾ 新語派が確固としてもっていた信念とはすなわち、言語は民衆の無意識に任せて放っておくと発展することがない、言語を発展させるのは文人、教養人の創造性であり、言語改革を通してかれらが庶民を導く役割を担っているのだという自覚である。そのために言語使用の現実は何ら束縛とならないし、遵守する必要などなかった。貧しい語彙や単調で堅い文体を、変化に富み、しなやかで美と力をたたえた言語へと発展させるのは、文学にたずさわる者の使命であった。それは、カジンツィのことばでは、教養(csín)と趣味のよさ(iz)を追求するいとなみであった。

正語派と新語派は、このように相対立する言語観をもって論争を高めていくことになる。両派の主張を担ったのは、等しく西欧から吹いてきた時代の新風に目覚めさせられ、それを自国の文化的発展のため適応させることに身を捧げた理想家たちであった。かれらはハンガリーにおける文化の後進性に憂慮したという点においても、またフランスのヴォルテールやドイツのヘルダーに感激し影響を受けたという点においても、同じ時代の教養人であった。新語派と正語派の意見の対立は、かれら双方が心に抱いた良きハンガリー語の追求という同じ理想が、結果として相対立する主張となって表面化したものだといえる。貴族的で繊細優美な文体を好む文学者カジンツィに代表される新語派の言語改革の試みは、しだいに庶民の言語感覚から遊離し、貴族階級の知識人層に限られた知的遊戯と化すきらいがあったことは否定できないだろう。それにたいし、正語派は庶民を取り残すおそれのある言語改革に警笛を鳴らし、庶民の言語の現実にもとづいてこそハンガリー語の将来があるとかがえた。かれら両派は等しく西欧の新思想の申し子であったが、カジンツィら新語派はフランス啓蒙主義的要素をより強くもち、デプレツェン派やヴェルシェギなど正語派の人々はドイツ・ロマン派により近かったといえるだろう。次に、論争の頂点となる1810年代の動きを詳しく追ってみようと思う。

2. 3 論争の展開

言語改革に関する論争の発端となったのは、1811年に発行されたカジンツィの風刺詩集『棘と花』(Tövisek és virágok)であった。これは、45編の短い詩からなる詩集で、主に古今のハンガリーの文人・学者を題材にし、風刺の効いたことばで批評している。とくにその中で、カジンツィは彼が三流作家とみなしていた人々を取り上げ、ラテン語の発音も正確にできないし

美的センスのない「不細工な文章」しか書けないと揶揄し、まるで「マヒがあるのに踊り、ことばを知らないのに書き、羽がないのに飛ぼうとする」ようだと皮肉る。そして、新語主義を「悪いものはいくら古くても悪いのだ、新しくても良いものは良いのだ」と擁護している。⁽²⁰⁾

カジンツィのこの詩集の出版を受けて、正語派からの反撃が始まった。『棘と花』出版の二年後の1813年、ハンガリー東北地方のカジンツィの住まいセープハロム（美しの丘の意、カジンツィ自身が名付けた）に一冊の冊子が郵便で届く。これがカジンツィとその信奉者を激昂させ、論争を頂点に高めた風刺冊子『物言い』（Mondolat）であった。⁽²¹⁾ 表紙の絵には、ロバにまたがった人物が片手で角笛を吹きながらもう一方の手にトライアングルを持ち、腰にはリュートとギターが下がっていた。発行した出版社は記されず、その代わりに発行場所としてディチハロム（奢りの丘の意）なる架空の地名が書かれていた。そして裏表紙には『棘と花』の一節の引用の下に、「ZAFYR CZENCZIへ」と明らかにカジンツィの名（Kazinczy Ferenc）のアナグラムによる奇妙な名が記されていた。この絵がカジンツィを風刺し、冊子が彼を揶揄しているのは、誰の目にも明らかであった。彼自身、「私をロバにまたがらせ、トライアングルをもたせた。リュートとギターは明らかに私のギリシャ・ラテン風の詩作をほめかしている」とある手紙の中で述べている。⁽²²⁾ また、トライアングルはカジンツィも入会していたフリーメーソンの象徴「万物を見る目」の三角形を示唆させた。

バラッシャは1898年の『物言い』出版の序文で、この冊子の内容自体はカジンツィや新語派を直接嘲笑したものではないとし、彼らが本当に激怒したのは表紙の絵のためであり、冷静さをなくした彼らは内容そのものも自分たちへの攻撃であると信じ込んでしまったのだと述べている。⁽²³⁾ 内容そのものがカジンツィや新語派そのものを皮肉っているのではなかったことは、この冊子の成り立ちを追うと明らかである。問題は、誰がこの冊子を書き、誰が出版を手伝ったかであった。

正語派の人々のあいだでは、『物言い』はすでに数年前からデブレツェン地方を中心によく知られていた。この手の新語派を皮肉る書物は数多く書かれ、手稿のかたちで人の手から手へ渡され読まれていた。それをドゥナーントール地方の文学愛好家で新語派を嫌っていたショモジ（Somogyi Gedeon）がを見つけ、大幅に手を加えて出版したのであった。ショモジが手を加えたのは序文と冊子の最後にある千語にもおよぶ新語のための字引であった。本来『物言い』そのものを誰が書いたかについては、これは意外なことでカジンツィ自身が判明させることになる。かれは『物言い』を受け取った翌月デブレツェンに行き、道で出会った旧来の親友で名高い医者であるセントジェルジ（Szentgyörgyi József）にこの話をし、冊子そのものを手渡した。セントジェルジは冊子に目を通して仰天し、その場でカジンツィに同じ題名の同じようなものを彼自身数年前に書いたことがある、と告白した。かれはその著作のなかでバルツェファルヴィなどカジンツィも批判している行き過ぎた新語主義者を皮肉ったのであったが、それがいつの間にかショモジという名の見知らぬ人物の手に渡り、彼の親友カジンツィを皮肉る書物へと作り替えられてしまっ

たのだった。巻末の字引に掲載された語の多くは過激な新語派バルツァファルヴィによって作られた荒唐無稽な語彙であった。カジンツィが『物言い』の出版で最も衝撃を受けたのは、彼自身が二流・三流とみなしていた同時代の作家たちと同列に並べられ、皮肉られたことだったという。

『物言い』の出版に憤慨したカジンツィの周囲の人々は、すぐにも『返答』を書く準備にかかる。カジンツィ自身に返答を書くようにはっぱをかけた者もあったが、彼の親友の批評家であり編集者のセメレ(Szemere Pál)やヘルメツィ(Helmeczy Mihály)はそれに値しないとして、やめさせた。結局、1815年に出版された『物言いへの返答』(Felelet a Mondolatra)は、その大部分がセメレの筆によって、そして現在ハンガリー国歌の作詞者として知られる詩人ケルチェイ(Kölcsey Ferenc)が序文を書くというかたちで協力し、できあがった。『ショモジとロバ』の題名で出版を考えていたが、「醜聞趣味で品がない(botrányos durvaságai)」とする検閲によってなかなか出版の許可が下りず、結局出版社の勧めでショモジの名をボホージ(Bohógyi = Somogyi と bohóc (道化師) から作った合成語)と変えたことで、出版が実現した。カジンツィはこの作品の出来に結構満足したようである。「とくにその序文にはためることが多く書いてある」と述べている。ただし、カジンツィと並んで『物言い』で揶揄された詩人ベルジェニ(Berzsenyi Dániel)は、『返答』の出版にいささかあきれた様子で「セメレは皮肉の子供に皮肉りをし返した。叱責か沈黙で対処すべきだったのに」とカジンツィに宛てた手紙に書いている。⁽²⁴⁾

新語派、正語派のあいだでやりとりされたこれらの皮肉り合戦は、決して品の良いものとはいえないが、この2つの読み物がかつてないほどの規模の読者層を獲得し、ハンガリー文学史上の一大ベストセラーとなって、その話題があらゆる知識人のあいだで取り上げられ、言語改革が国民的議論となったことは、ゆるがない事実である。

2. 4 ケルチェイの新語主義

ここで、カジンツィの弟分として、彼に多大な尊敬の念を持ち、『返答』の序文を書いた詩人ケルチェイの新語主義のありかたを見てみたい。『返答』出版の1815年7月に彼がカジンツィに宛てた手紙の中に、彼の言語観ともいえる思想がよく表されている。ケルチェイはデブレンテイ(Döbrentei Gábor)⁽²⁵⁾が彼に対して書いてきたことばにいささか傷つけられたようだった。「タカーチやシャーギの味方をするわけではないが⁽²⁶⁾…ことばに対してあまりに自由に、むこうみずになってはならないと思う…ことばをねじ曲げてしまわないように気をつけないと、そして慣習にも配慮しなければいけないだろう。だって、誰に向かって書くのだ？」⁽²⁷⁾デブレンテイの最後のことばは、新語派への批判のいわば核心をついているともいえる。慣習への配慮、誰が読み、誰が使う言語なのかという新語派への問いは、新語派の大量の創作が庶民を取り残していくと警告を発した、まさに正語派の問いであった。これに対し、ケルチェイはカジンツィに、もはやまともな新語派はカジンツィと彼、そしてセメレとヘルメツィの4人だけになってしまった、と嘆いている。⁽²⁸⁾

ケルチェイはまず、ハンガリー語を「完全に、異論の余地なく西方の言語である」とした。⁽²⁹⁾ ケルチェイはここで、ハンガリー語がヨーロッパ諸言語と系統を同じくすると考えたわけではない。比較言語学的な意味においては、他の多くの新語派と同様、彼もハンガリー語には東方にも西方にも兄弟言語が存在しないと考えた。当時、フィン・ウゴル比較言語学がすでに18世紀末ハンガリーでも始動していたが、フィン・ウゴルに限らず、トルコ系などの東洋説をすべて否定したのは、啓蒙主義思想に傾倒した18世紀末から19世紀始めにかけての知識人全体に共通している。⁽³⁰⁾ ケルチェイがここでいう「西方」の意味は、西欧のことではなかったが、そうなのだというのである。ハンガリー語は未発達な民族の言語であったので、まず最初にドイツ語やスラブ語から語彙を借用することにした。しかしそれは主に庶民であり、キリスト教を取り入れた知識人たちはラテン語を学び、そこから言語改革を行ったのだとした。すなわち、今日のハンガリー語の自由な語順は、ケルチェイに言わせると、ラテン語の利点を先代がハンガリー語に取り入れ改革したからであった。このように、文法をその言語に元来備わった性質と解さず、言語独自の性質はより良きものを求め識者・文人が作り上げてきた英知の産物であるとした彼の思想は、従って文法研究をまやかしとする思いにつながる。「ハンガリー語の文法など今日に至るまでなかったし、これからも決してできないと予言するし、またそう願っている」と彼は書いている。⁽³¹⁾ また慣習について、何が慣習となりまたならないかを決めるのは文法的正当性ではなく、美しい響きや均整、感動などで効果を与えるある種の美的精神である、と述べている。さらに、そもそも慣習などというものがハンガリー語に存在するのか、と問いかけ、庶民は慣習など作れない、なぜなら庶民のことばは耕作地ごとに異なっているのだから、としている。

ケルチェイのことばをもって、庶民への軽蔑や知識人の奢りと評するのは性急な結論であろう。かれは、先人たちのハンガリー語を洗練させるための尊敬すべき知性と努力を回顧し、今度は自分自身がその崇高な役目を引継ぎ、ハンガリー語をさらに洗練させることによって、終わることなく進歩する民族の歴史を創造する一端を担うことを願ったのである。やりすぎるな、という警告にケルチェイは、「わたしは、進歩というものに終わりはないと思う」という。詩人はことばを進歩させる。ことばが進歩することによって、庶民もまた進歩することができる。詩人の努力があつてこそ、民族の歴史は進歩し続けることができるのである。正語派のおこなった文法研究は、発展途上にある言語の法則やら規範に人々を縛りつけ、美的精神で民族を導く宿命をもった詩人にまで、その創造の泉を慣習という名の泥で汚す不毛な行為であるとケルチェイは思ったにちがいない。

2. 5 論争の終幕——「正語派と新語派」論文

1810年代に最高潮に達した両派の論争に終止符を打ったのは、言語改革の中心にあったカジンツィ本人であった。長びく論争にいささか嫌気をさしてきた彼は、両派の調停に乗り出し、1819年「我々および他の諸民族における正語派と新語派」(Ortológus és neológus nálunk

és más nemzeteknél)と題する論文を発表した。そこで彼は新語派と正語派両方の長所と短所を述べたうえで、「熱心な正語派も熱心な新語派もひとしく良く、そして美しく書く」という有名なことばをもって、両者の果てしない争いに終止符を打った。この論争の調停は、等しく言語の問題に大きな関心を払い、良きハンガリー語の追求のために苦勞を惜しなかった正語派、新語派両者を評価したもので、トルナイはこれについて「燃えさかるハンガリー精神と教養の高みへと向かう努力が、ヨーロッパのハンガリー精神の名において、完全な調和の中で溶け合い静まった」結果となったと論じている。⁽³²⁾ いいかえれば、ハンガリー教養社会をはじめて西欧の水準へ追いつかせた「文学の独裁者」カジンツィは、彼の内にハンガリー民族の精神が統合され結晶となっていたといえるほど、絶大であった。こうしてカジンツィの調停によって、言語改革論争は一見勝ち負けのない仲直りで幕を閉じたかに見えたが、事実上は明らかに新語派の勝利による終結であった。それは後年、主にカジンツィの死後、学術協会の事業によって制度化されていく。しかし学術協会によって打ち立てられた新語派の勝利は、やがて19世紀後半新たな正語派の攻撃を生むもともとなり、再び言語改革の見直しを要求されることとなるのである。

3. 過渡期としての「革命」「妥協」

3. 1 改革期の役割

1819年カジンツィの「正語派と新語派」論文によって、両派の論争の一応の解決がみられ、1830年代に入ってすぐ文学界を長い間君臨したこの偉大な文人が世を去ると、ハンガリー文化史でいわゆる「改革期」(reformkor)といわれる時代が始まる。国民的愛国詩人といわれるヴェレシュマルティ(Vörösmarty Mihály)やペテーフィ(Petőfi Sándor)が活躍し、民族独立の夢が文学にとどまらず政治的要求となって、急進的な民族主義を鼓舞し、やがて1848年の革命へと至る過程を形成する時代である。

改革期は、言語改革の視点からみれば、カジンツィの死後、新語派の功績をさまざまなかたちで集大成する作業が行われた時代である。ベシェニェイ以来の目標であったハンガリー学術協会の結成は1825年に実現し、その主な役割は多数の辞書、文法書の編纂、そして正書法の制定によってカジンツィとその同志たちがやり遂げた運動を記録し、普及させ、時代のハンガリー語に定着させることだった。学術協会の結成、活動に指導的な役割を果たしたのは、カジンツィの次の世代のロマン派の詩人・作家らであり、かれらによってカジンツィらの功績は絶対的に評価され、不動の地位に高まった。もはやだれも言語改革の評価を否定することはできなかった。カジンツィ自らは正語派・新語派双方を評価し対等な結論に導いたつもりが、後世の努力によって事実上の新語派の勝利が確立されたのである。それはひとえに学術協会の功績であった。

1830—40年代には、学術協会によって詩人ヴェレシュマルティや文学者トルディ(Toldy Ferenc)の音頭で哲学、法律、数学の専門用語辞典が編纂されたほか、独語—ハンガリー語辞典、方言辞典も作られた。ハンガリー語文法、語結合の手引きなどの文法書も整えられ、

1848年にいたるまでの約20年間は、ハンガリーにおける辞書出版の黄金時代となった。18世紀末にはまだハンガリー国中探しても全く同じように綴る人間は二人としない、といわれ、一人の人間の内でも綴りに変動があるのが普通であったが⁽³³⁾、1832年学術協会によって正書法が制定され、これが共通文語の確立を促す役割を果たした。ここでも学術協会はカジンツィが実際使用していた正書法を尊重、踏襲したことにより、正書法を通して言語改革を再評価し、その偉業を定着させることとなった。⁽³⁴⁾

3. 2 「革命」から「妥協」にいたるまでの言語状況

1848年革命について、それにいたる過程や敗北の政治的要因などをここでは細かく述べることはやめておく。ただ、革命の敗北とそれに続く新たなドイツ化政策がハンガリーの精神生活や言語運動にいかに影響したかは、次章の新正語派の出現の背景を考える上で、避けて通れない重要な論題である。

革命とそれに続く49年8月までの自由戦争で敗北してから、ハンガリーには帝国による厳しい新絶対主義政治とドイツ化政策が待ち受けていた。内務大臣バッハの指揮の下、徹底的な中央集権化が始まり、かつてのヨーゼフ時代の再現のように行政・教育の言語のドイツ語化がなされた。かつてヨーゼフ死後の1790年、ブダのハンガリー国会で可決された学校教育のハンガリー語使用は、1856年ウィーン中央政府の発令でふたたびドイツ語に置き換えられた。経済活動においても、ハンガリー語の使用は大幅に制限された。というのも、いわゆる「バッハ体制」下、かつてない資本主義的発展の口火が切られたが、それはオーストリアによる植民地的支配の裏返しでもあり、経済活動におけるドイツ語使用の促進とハンガリー語の衰退は必至であった。実際経済活動におけるこのような言語状況は、1867年「妥協」によって「オーストリア帝国」が「オーストリア・ハンガリー二重帝国」に再編されても、基本的には変わらなかった。工場や企業におけるドイツ語使用は、第一次世界大戦のおわりまで続いたところが多かったのである。

このような言語状況の中、文学活動のみが逆にますます意識的なハンガリー語追求の精神を高めることができた。新絶対主義の体制の下で言語的規制が強まる中、文学と学術の領域が唯一のハンガリー語、ハンガリー民族精神追求のはけ口となっていた状況は、18世紀末の近衛兵文士たちが置かれていた状況と酷似する。しかし、閉塞状況におかれた文学者らが過激な言語的民族主義に走り、言語改革の時代を過度に賞賛したり、自らますます過激な新語創作をはじめたことが、次章で見るようにあらたな新語派批判の種をまく結果になるのである。

やがて60年代になると、絶対主義から立憲主義へと帝国政治が徐々に変化するのに平行して、言語的状況も緩和され始める。学術協会は50年代には当局の厳しい監視の下に活動を制限されるのを余儀なくされたが、1864年にはペシュトにハンガリー科学アカデミーの建物が開設され、ハンガリー語発展のための本拠地として新たに機能し始めた。ハンガリー語日刊紙も複数刊行され、改革期に創設された国民劇場も、ハンガリー語復権に大きな役割を果たした。しかし、

「妥協」以降、絶対主義の緩和に伴い文学のハンガリー語への貢献は衰え始める。それまで精神上、国民的関心の中心的役割を担っていた文学は、ハンガリー語の使用が緩和されるにつれ、政治色を失っていくこととなる。ハンガリーの政治的要求がかなりの程度満たされ、ハンガリー社会が19世紀末に向かってかつて見ぬ経済的繁栄へと突き進みはじめると、言語ナショナリズムはやがて影を潜めはじめたかに見えた。新正語派の到来は、その過程に現れた、第二の、そして最後の言語改革批判である。

4. 言語改革批判——新正語主義の反撃

4. 1 行き過ぎた新語主義

新正語主義 (az Új Ortológia) の出現は、48年革命敗北後のドイツ化政策と深く関係している。新絶対主義時代の到来によりハンガリー語の権利が脅かされると、カジンツィの時代はハンガリー精神史における黄金時代であったと回想されるようになった。自由戦争のさなか戦場に散った若き愛国詩人ペテーフィも、その在りし日に廃墟と化したセープハロムを訪れ、「まだだれもハンガリー人でなかった時代に」また「ハンガリー人であることが恥であった時代に」誇り高くハンガリー人であろうとしたこの地の巨匠への情熱的な尊敬の念を、詩に詠んでいる (Széphalmon, 1847年7月11日)。言語改革の功績は、ますます肯定的に評価され、賛美されただけでなく、学術協会を運営する知識人・文学者セーチェーニ (Széchenyi István)、ヴェレシュマルティ、バイザ (Bajza József)、トルディなどは、自らさらに新語を作ることで言語改革を引き継ぎ、ハンガリー語を豊かにしていった。

しかし、ハンガリー語のドイツ化は、教育・出版の言語がドイツ語へと移行する中で、避けることができない現状だった。革命後、ハンガリー語で刊行された公的な機関誌には『ハンガリー新聞』 (Magyar Hírlap) や『ブダペスト新聞』 (Budapesti Hírlap) などがあったが、これらの新聞の記事もほとんどが単なるドイツ語からの翻訳であり、ネーメトに言わせるとそれは「言語の退廃、劣悪化の温床」であった。⁽³⁵⁾ ドイツ語からの借入語、ドイツ語の直訳による語彙、そしてドイツ語的言い回しなどがハンガリー語に溢れ始めた。活動の領域を奪われ、行き場のなくなったハンガリー語は、さらにそれ自身のドイツ化という惨状に瀕していた。

このハンガリー語のドイツ語化にたいして、言語改革の流れを汲みながらもっとも大胆に反発したのはブガート (Bugát Pál) であった。医学の教授であった彼は、アカデミー会員としてその専門分野で医学用語辞典の編集にたずさわり、自ら多くの新語を作った。彼が1857年に著した『語の作り方教本』 (ソーチンタン Szócsintan: これは szókat csinálni tanít から略語を自ら作ったもの) は、彼の創造性の豊かさを証明はしたが、あまりにラディカルな新語派として、多くの反対を招く結果となった。この『語の作り方教本』は、この方法を使えばハンガリー語の語彙を際限なく製造することができる、というもので、そのあまりに奇異な発想は学界で驚きをもって迎えられた。この本の序章をアカデミーの会合の席で読み上げたブガートに対して、当時アカ

デミーの代表的存在であり、自ら熱心な新語派であったトルディでさえ、そのような語作りはハンガリー語の法則に合わない受け入れられないものだ、とその場で厳しく批判した。結局この本の出版はアカデミーによって阻止され、手稿のままとどまることとなった。

4. 2 サルヴァシュと『語警人』の始まり

上述のブガートのような行き過ぎた言語改革を進める者に対して批判の声は上がったものの、カジンツィ時代の言語改革そのものに対して直接疑問や批判を投げかける者はかつてまだいなかった。それをはじめて行ったのが、サルヴァシュ (Szarvas Gábor) とその一派である。1860年代まだボジョニ (現在のスロヴァキアの首都ブラチスラヴァ) で教師をしていたサルヴァシュは「ハンガリー語らしからぬ事ども (Magyartalanságok)」と題する論文を発表し、ハンガリー語の改革の必要性を説いた。1871年アカデミーの会員に任命されブダペストへ上京した彼は、翌72年に彼の編集によって雑誌『ハンガリー語警人』 (Magyar Nyelvőr) を刊行した。⁽³⁶⁾ この雑誌の目的は、ハンガリー語における「ハンガリー語らしからぬもの」を批判し、修正へと導くことであったが、その標的となったのは言語改革における新語派のように外国語の語彙ではなく、逆にハンガリー語に今や溢れている新語の方であった。

1867年「妥協」の締結の影響を受けて、ハンガリー語の使用の制限はどんどん緩和され、教育・学術の各分野だけでなく、報道、すなわち新聞や刊行誌類においてもハンガリー語が進出しはじめた。そのハンガリー語には新絶対主義時代のドイツ語の影響も見られたが、それ以前にかつて言語改革の名のもとに創作された新語の氾濫があった。それら新語の中にはハンガリー語の法則、つまり文法にそぐわない外国語風の語構成による派生語、合成語、そして外国語風の文体もおびただしい数に上った。サルヴァシュ一派による『ハンガリー語警人』の活動は、このような行き過ぎた造語や表現を一掃し、言語改革の悪の産物を糾弾し追放する必要性から端を発したものであった。こうして『語警人』は言語改革という過去の栄光の遺産に対して宣戦布告し、ふたたび以前の言語改革論争に似た運動が繰り広げられることとなった。行き過ぎた新語創作が正語派の怒りを買ったかつてのバルツァファルヴィが、今ブガートに代表される急進的な新語主義にとってかわり、新たな正語派を刺激したわけである。ただ、19世紀初頭の言語改革と大きく違う点であり、もっとも重要なことは、かつてハンガリー語の現状を憂い、改革派としてありのままの言語をよしとする正語派と戦った新語派が今度は批判の対象となり、かれら新語派が勝ち取った財産である新しい語彙の数々が、今や逆に改革を必要とする対象とされたことである。

「不確定な基礎の上に打ち建てられ、性急におこなわれた言語改革が法則に反した語彙創作をもたらしたが、そこには規則性の復活を、また外国語との接触が不純な表現を作り出したが、そこには純粋性の促進をわれわれは願っているのである」とサルヴァシュは『語警人』の創刊号の冒頭で述べ、言語改革の遺産を批判の対象にすることを明確にした。⁽³⁷⁾ 彼ら新正語派がめざした新しい言語改革は、19世紀初めの言語改革が生み出した無数の言語的法則を無視した語彙や、

世紀半ば以来急増した外国語の文法に影響された語彙や表現を、ハンガリー語の文法にかなった自然な語彙へと還元する試みであった。この若い世代にとって糾弾すべき保守派とは、言語改革を絶賛し、言語改革によって創られた語彙を擁護する人々、特にアカデミーの代表的文学者トルディや言語学者フォガラシ(Fogarasi János)など新語彙の集大成としての辞書の編纂にあたった人々であった。⁽³⁸⁾『語警人』は刊行が始まった時点からすでに、かなり戦闘的な性格を帯びていた。「ハンガリー語の悲惨な現状は言語改革のせいである」と述べたサルヴァシュの言語改革に対する痛烈な批判は、当時の人々に衝撃的な驚きをもって迎えられた。「言語改革がハンガリー語を腐敗させ、退廃の一途をたどらせて以来、ハンガリー語は病み続けている」といってはばかりないサルヴァシュは、言語改革そのものを誤りとみなしただけでなく、それに続いた改革期に花咲いたナショナリズムの意識高いロマン派の詩人ヴェレシュマルティやアラニュ(Arany János)のことも欠陥を見いだそうとした。言語改革後の文学の中に、明らかに常識的な言語感覚が受け入れがたい語彙や、その結果自然淘汰され消滅した語彙が少なからずあったことは、当時のだれもが認めることであった。しかし、それを言語改革のもたらした悪の産物と断言し、金字塔である言語改革そのものに疑問を投げかけた新正語派の行為はいかにもむこうみずで大胆であり、たちまち賛否両論の論議を巻き起こしたのである。

では、新正語派の言語観はどのようなものであったのか。それを、『語警人』紙上で論議した二人の代表的言語学者の主張を通して見てみたい。『語警人』はおもにサルヴァシュとヴォルフ(Volf György)、そしてまだごく若いシモニ(Simoni Zsigmond)が中心となって活動していた。シモニはのち、ドイツの青年文法学派の理論をハンガリーに紹介したことで知られるが、『語警人』刊行当初の段階では彼は雑誌の中心的理論となった言語観には直接関与しておらず、言語改革批判の思想的基盤はサルヴァシュとヴォルフの二人にあったといえる。

「彼らは法則ということばを議論のはじめにも終わりにも、批判においても弁護においても、結局はこの語に集約されるほど多用している。彼らほどこの語を頻繁に使用する者はいないだろう」とネーメトが述べているように、彼ら新正語派は言語の法則性を第一の基準と考えた。言語は自然の産物であり、庶民の言語、自然言語が完全なのだと考えた。⁽³⁹⁾それゆえ、言語改革の試みのような人為的な言語操作は言語を発展させるところか、逆に腐敗させる行為であった。とくに文学における言語は、自然で完璧な言語を作家の思いつきで変にかき混ぜた代物であるとして批判した。そして、言語の発展は外的な影響を受けてではなく、内部に秘めた言語独自の法則に従ってなされるのだとした。新正語派は言語を、それを使う人間や社会によっては変化しえないある種の自然科学的体系としてとらえたのであった。その手法は厳密なまでに理論的で、彼らの言語の法則性を追求するさまはほとんど自然科学者の態度といえた。ネーメトは、その過激なまでの厳密性は自然科学者というより、さらにいえば過激なまでに実証主義的な化学者のそれに匹敵した、とまで述べている。⁽⁴⁰⁾このように言語を純粋な理論的法則ととらえた『語警人』派は、したがって言語改革でカジンツィらが主要な関心事とした言語の美学的問題、文体的問題を

完全に排除した。また、言語の社会性といった問題もかれらの興味の外にあった。現実の言語から遊離し、いわば理論の壁の中に閉じこもったサルヴァシュらの姿は、よくいえば理想主義的であり、悪くいえばドグマティックであった。

しかし、彼ら『語警人』派の言語観の根底に流れるのは、やはりハンガリー語の純粋性を追求するという点において、世紀初頭の言語改革の推進者たちと同じ理想であった。かつて新語派の人々が語幹と派生辞の組み合わせで矢継ぎ早に新しい語彙を創造したのもハンガリー語の純化をめざす試みであったように、言語改革批判を行うサルヴァシュらにとってもハンガリー語の規則性（文法）にそぐわないこれら過去の産物を払拭することがハンガリー語の純化運動だったのである。新語派にとって創造がハンガリー語を発展させたのに対し、新正語派にとっては排除がハンガリー語を発展の道に立ち戻らせた、といえよう。新語派が絶対的に信頼したのは、文学に携わる者の教養あふれる美的なことばを極める努力であり、新正語派はかつて正語派が考えたように、庶民のことば、意識的な言語操作を加えない自然な言語がハンガリー語の純粋性を保っているとした。論争の展開は、若く過激な新正語派の宣戦に対して新語派の末裔たちがいまや保守派として応戦するかたちでおこなわれ、攻防戦を繰り広げた。次に、論争の経過を追いながら、新語派、新正語派の両方の主張をたどってみる。

4. 3 『語警人』の活動と新語派の反論

『語警人』のサルヴァシュとヴォルフは言語改革批判において思想的に一枚岩となって戦ったが、ヴォルフはサルヴァシュ以上に辛辣な口調で言語改革を非難した。かれは『語警人』に「言語改革は言語改悪である」と題する記事を載せ、その中で言語改革は必要でなかったばかりか、ただハンガリー語を墮落させただけなので、言語改革によって生まれたものはすべて排除されるべきであると論じた。⁽⁴¹⁾ また、最初の数年間『語警人』に連載されたコラム「雑草摘みとよそ者狩り」(Idegen csemeték, Fattyú hajtások)では、当時の新聞・雑誌に氾濫する行き過ぎた新造語や奇異な文体をひとつひとつ取り上げては批判し、正しい語彙や表現を提示した。また一般紙に限らず、法律、文学、医学、工学などあらゆる分野の刊行物から語彙や表現を取り上げて議論した。例えば19世紀後半すでに消えつつあった受動態を過度に使用するのをとがめ、場所を表す接尾辞にさらに形容詞化する接尾辞*i*をつける誤った語法(たとえば *szállodá-ban-i* 「ホテルの中でーの」)を指摘した。彼らの基準はことばの美しさや響きのよさではなく、あくまでハンガリー語文法にのっとった規則性であったので、例えばいくら長たらくて耳障りのよくない語(例えば「その名付けようのなさにおいて」を意味する接頭辞や接尾辞が数珠つながりになった語 *megnevezhetetlenségében* など)でも、それがハンガリー語の文法に照らし合わせて正しければよい語だとした。

サルヴァシュらはまた、「言語修正評議会」(Nyelvjavító tanácskozás)と称する集まりを発足させた。これは1874年に始まり、『語警人』紙面を通して召集を呼びかけたもので、この

会議の目的は作家、辞書編集者、各学界の専門家、教育関係者などあらゆる分野の人々に呼びかけて、ハンガリー語の不良な点を指摘し、正しいハンガリー語の確立のためにその諸条件の採択と普及を行うことであった。会議は毎月最後の土曜日の夜8時に開かれ、各界の26名の代表者が参加した。そして、会議での議論の結果は、「誤った語と表現の修正」と題する連載記事となって『語警人』紙面に現れた。

このように活発化した『語警人』の活動と、今や保守派に回されたアカデミーの大御所知識人たちの批判がもっとも激しくぶつかったのは、翌1875年のことであった。言語改革擁護派の代表であるトルディは、アカデミーの会合で新正語派批判の論文を読み上げた。⁽⁴²⁾ そこでトルディは、言語改革の遺産を引き継いだわれら子孫たちのこの半世紀の間にハンガリー語が見せた進歩は、他の言語が2-300年かかったのに匹敵するくらいである、と評価している。そして、今「国民全体によって崇められている」言語改革を攻撃する新正語派に対し、彼らが決闘を申し込むなら、アカデミーが名誉をかけて手袋を拾おうではないか、と勇ましく宣言している。論文は3部からなっているが、第一部で新正語派の言語改革批判に対して宣戦布告したあと、第二部で新正語派の批判を2つの点について論駁している。1つは、ハンガリー語の合成語では動詞の語幹が構成要素になることはできないという批判であるが、これには法則だけで割り切るのではなく、語感にあえばそのような語構成も良いとして、例えば *rakpart* や *láthatár* は良いが *hálsoza* や *irtoll* はごちなく違和感を感じさせるので良くないとした。また第二の点の、死語となった派生辞を使った造語はよくないとする意見に対し、その派生辞の意味が今日まだ感じられるものは、積極的に利用して語彙を増やすべきとした。そのような派生辞を再び生き返らせることによって、「言語精神」を機能させ続けることができるのだとした。

ここでトルディのいう言語精神(*nyelvszellem*)とは何であろうか。第三部でトルディは彼の言語観をまとめ、「言語精神」(*nyelvszellem*)と「語感」(*nyelvérzék*)を区別している。「言語精神」とは、美学においていくら表現しようとしてもその本質は定義できないもので、元来無から言語が創造された力を意味する、としている。また「語感」とは、言語を維持する能力で、その役目は言語精神が生み出したことばを無意識で本能のように機能する法則性によって磨き整えることで、必要とあれば法則を拡張して行われる、とする。そして、太古の時代に言語精神が始めた創造を「文法家ではなく、詩人と作家が語感の才能を駆使して」引き継ぐのである、という。

⁽⁴³⁾ 先代の新語派と同様トルディも、文法性という理論でことばを制限していく新正語派に対して、「定義できない」「本能のような」語感を発揮する能力をあたえられ創造する詩人(新語派)という構図を描いている。また、言語改革が多くの良くない語彙も創出した事実は認めるが、「怖れることはない」、語感がやがて悪い語を排除してゆくことになるのだから、とするところには、新語の是非を「語感」のもつ審美眼のみにゆだね、限りなく創作しようとするきわめて樂觀的な新語派賛美が感じ取られる。しかし、このような新語派のダイナミズムこそ、トルディのいう「若く生き生きして、力強さと合まった妖精のごとき美しさ」をたたえたハンガリー語を創

出したのだった。⁽⁴⁴⁾

新正語派と新語派の子孫のこのような論争は、次第にアカデミックな世界にとどまらず、一般新聞の紙面をも舞台にして、当時の広い読者層の共通の関心を引き起こした。⁽⁴⁵⁾ 正しい語感とは何か、何が正しく、また何が正しくないハンガリー語なのか、どんな語彙を使うべきか、また使うべきでないか、など論争は世紀初めの言語改革の時のように、一般社会を取り込んで拡大していった。その論争によりやがて和解のきざしが表れたのは、1880年代になってからであった。新正語派の代表格であるサルヴァシュ自身が、和解への一步を踏み出したのである。彼は、言語改革によって生まれた多くの語彙は、かつてなかった語法や仮にあったとしても語感に訴える生命力がもうすっかりなくなってしまった語を用いている、と批判した上で、しかしそのような新語の中でも今日の語感が全くといってよいほど違和感を覚えなかったり、きわめてかすかにしか感じなければ、残しておいてもよい、とした。結局サルヴァシュは自らの信奉する厳密な法則性（文法）を主としながらも、現実には言語が取り入れ定着してしまった語彙に関してはこれを認めるというかたちで妥協したのだった。それは、彼らの文法という厚い城壁の中に、美学的要素というすきま風が入り込んだものといえよう。サルヴァシュが両派の優れた点を融合させた妥協で論争を終えようとしたやり方は、60年余り前カジンツィが「正語派と新語派」論文で終わらなき争いを終結させたのによく似ていた。『語警人』派のヨアンノヴィチ(Joannovics György)のことばによれば、文法と美学が一致協力してことばを豊かにすることができるのであり、彼はこの妥協を「芸術と科学の協調」と呼ぶほどに評価している。⁽⁴⁶⁾

4. 4 新正語派のもたらした影響

新正語派の運動は学問にたずさわる者だけでなく、教育・出版・マスコミなど言語社会生活にかかわるあらゆる人々の注意を喚起し、ことばに対する意識を再度高めさせた。彼らの与えた影響は、なんといっても自然科学の分野において著しかった。特にブガートの『語の作り方教本』以来、新造語がもっとも激しいいきおいで際限なく生産された自然科学においては、新正語派による語彙修正の試みの効果が真っ先に波及した。その自然科学語彙の修正に努めたのはシリ(Szilý Kálmán)である。彼はサルヴァシュらの語形態の法則を取り入れ、外来語についてはすでに定着している用語はそれを使うとした。シリの新語の整理において果たした役割は大きく、そのため彼の改革前の時代の医学書は今日解読できないといわれるほどである。また彼は、ほとんど一人で言語改革の語彙を収集し、『ハンガリー言語改革辞典』(A magyar nyelvújítás szótára: 上巻1902年、下巻1908年)として著した。彼によると、一連の言語改革の運動で約1万の正当な語彙と2万から3万の不出来な語彙が生まれたのだった。⁽⁴⁷⁾

新正語派の運動は、自然科学の領域でこそ一定の効果をもたらしたものの、文学においては敵視されるのみに終わったといえる。それは、文学の自由な創造性を尊重する態度が、新正語派の厳格な法則重視の態度に真っ向から反発したからである。文学者によれば、詩や散文のことばま

で、彼らの文法に牛耳られるのはまっぴらごめんであり、言語学者は言語の法則の発見者にとどまるべきであって、語彙の創造にまで首を突っ込むべきではない、というのが彼らの主張であった。

こうして19世紀末再び言語改革をめぐる論争に花が咲いたが、この第二の論争は決して最初の論争の規模をしのぐものではなかった。カジンツィの時代の言語改革で達成された成果は、今日のハンガリー語の中におびただしい数となって定着し、とうていそれなしにはやっていけないほどに現代ハンガリー語の中で重要な核となっている。新正語派の挑戦は結局のところ、その理論的正当性で言語改革全体への反省を試みるのには成功しなかったが、言語改革の結果を再検討する機会を世紀末の言語社会に与え、おびただしい数の語彙を整理・検討するきっかけとなった点で意義あるものであったといえるのではないだろうか。

5. むすびに代えて

本論文では、ハンガリー言語文化史上二度の波紋をかきたてた19世紀の言語改革について、その展開を社会状況との関連において検討した。世紀転換期に始まったドイツ化政策は、逆に活発なハンガリー語改革運動へと結びつき、やがて19世紀の最初の20年間に新語派と正語派の激しい論争へと発展した。啓蒙的貴族知識階級による大量の新語作りは、庶民の言語感覚から遊離し、やがて庶民の言語的慣習を重視する正語派によって厳しく批判された。言語改革を推進した新語派が勝利を収めた後も、19世紀半ばの新たなドイツ化の流れの中で、過激となった新語主義を今一度批判すべく、新正語派とよばれる一派が誕生した。

言語改革は、おびただしい数の新語を生み出し、その過半数は文法をあまりに無視した荒唐無稽な創作であったり、一時的には使われてもすぐにまた歴史の中に葬り去られるものであった。しかし同時に、当時創作され、現代ハンガリー語において不可欠な重要語彙となったものも、また容易に数えられないほど存在する。言語改革は、ハンガリー語を急速に豊かにすることで言語史上大きな変化をもたらしただけでなく、精神文化史上の黄金時代として回顧されるほどに、近代ハンガリーの民族意識の記念碑となった。今日、言語改革の成果を賞賛しない者はない。しかし、言語改革のさなか、それを真っ向から大胆に批判した正語派はどう評価されるべきであろうか。

最後になるが、本論文のもう一つの課題であるこれら二つの正語派の比較検討をしてみたい。手を加えない庶民の素朴な言語を完全なものとするデブレツェン派など正語派の考え方は、言語の発展を肯定的にとらえるという点で、新語派以上にドイツのロマン主義の影響を濃く受けているといえる。それは、新正語派においても人間の手の加わらないところにある言語の完璧な法則性を絶対視するという、これもまた言語の自律的な発展性を尊重する態度に終始一貫され、受け継がれている。そうしたサルヴァシュら新正語派の言語研究のありかたは、ドイツの青年文法学派の歴史言語学における、言語の科学的法則性を追究する態度に多くを学んでいる。このように、

2つの正語主義はそれぞれ、ドイツの同時代の言語思想に多くの影響を受けているが、正語派におけるヘルダーの前近代的言語哲学にもとづいた具体的な庶民の言語の追求が、やがて新正語派においてはフンボルト・グリムの経験的科学を経た青年文法学派の、話し手の意志を超越した言語の自然科学的法則性の追究へと変化したといえる。

正語派の主張は、言語改革の圧倒的な勝利の前に、その力を十分発揮できなかったかのようなものである。しかし、過激になろうとする新語主義に警笛を鳴らし、その語彙創作を言語の法則の観点から点検し、批判した彼らの活動は、新語派の暴走をくい止め、新語の取捨選択に一定の基準を提供した点で、大いに評価できるだろう。このような彼らの功績がなかったら、現代ハンガリー語の形態論は、言語改革以前と以降の時代区分を据えない限り、その本来の法則性を洗い出すことも困難であるにちがいない。カジンツィらの言語改革は、正語主義の協力を得てはじめて、真に豊かで均整のとれたハンガリー語改革に成功したのではないだろうか。

中東欧の諸民族における19世紀の言語改革は、その方法論に議論の余地がもたらされたものの、政治的・経済的に優位にあった支配言語の陰でなおざりにされていた母語の価値を再認識させたという点で、計り知れない意義があった。これら諸民族の言語は、いまや政治経済的・文化的・学術的活動を総合的に運営しているだけでなく、その民族の誇りそのものであるという点においても、西欧の諸言語と何ら違いがない。いや、むしろ後者においては中東欧の諸民族の方が強く自負しているといってもよいだろう。今日、我々の周りには、社会政治状況の中で衰退をやむなくされている言語が多くある。中には消滅寸前の言語も存在する。文化的全体主義への反省、多文化主義・多言語主義への再認識が急務となっている今日の世界で、前世紀の中東欧の言語改革の試みは、我々に多くの示唆と勇気を与えてくれるものと思う。

注

- (1) 本論文では言語改革に関する論争とその言語観を主題とするので、言語改革で生み出された語彙の具体的な例や、造語の方法について詳しく述べることはしないが、概観として、以下にTolnaiのまとめた言語改革における語形成の分類を紹介する。(cf. Tolnai Vilmos, *A nyelvújítás*, pp. 204–213.)

- ①古語、死語の再生 év, hon, őrなど。意味の変遷を伴ったものもあるhős (もともと「若い」の意)、képez(もともと「想像する」képzélの意)
- ②固有名詞の普通名詞化 alag(-út) (ペシュトのAlag)、lak (Széplak, Újlak)
- ③方言の一般化 betyár, csokor, iker, sajnos
- ④外来語の発音のハンガリー化 bankár(banquier), csilla(scilla), rim(rime)
- ⑤外国語の逐語訳 álláspont(Standpunkt), befolyás(Einfluss), ellen-, rokonszenv(anti-, sympathia)
人名 Szilárd(Constantinus), Győző(Viktor)

- ⑥合成語 名詞+名詞、名詞+形容詞(-dús, -ellenes, -képes, -kész)、
同化 anyag=anyai+dolog(materia)
- ⑦派生語 派生辞を用いてもっとも多く語彙を作った。初めは古い語彙の例に従って、やがて規則のないやり方で大量に行われた。
- ⑧派生辞を除去し別品詞の語を作る -os/-es/-ösをとる(dac, düh, hiány), -ú/-űをとる(dombor, gyönyör), -ban/-benをとる(egyetem, hossz), -itをとる(tan), -lをとる(gúny, séta)
- ⑨語をちょんぎる címer>cím, gyöker>gyök, reménység>remény
- ⑩合成語構成要素の単独使用 napkelet>kelet, napnyugat>nyugat, éjszak>szak
- ⑪短縮 bizodalom>bizalom, álladalom>állam, könnyűélmű>könnyelmű, nyughatatlan>nyugtalan, -hatatlan/-hetetlen>-hatlan/-hetlen
- ⑫発音を外国語に似せる doktor>tudor, controleur>ellenőr
- (2) 東欧の諸民族における言語改革は、少しずつ時期が異なるものの、ほぼ18世紀末から1848年革命を経て、その後19世紀末にかけての一世紀に起こり、平行した展開を見せている。例えばチェコでは18世紀末 Dobrovský や Jungmann がチェコ文語を確立したし、48年革命後1870年代からはドイツ語の影響を排除しようとするチェコ語純化運動があった。スロヴァキアにおいては状況はさらに複雑で、支配言語のドイツ語・ハンガリー語の排除のほか、チェコ語とも確固とした区別をなすスロヴァキア文語の確立が48年革命前後に Štúr らによって達成された。また、ルーマニアでは18世紀末トランシルヴァニア学派によって始められた西欧志向(ラテン主義)に基づく近代ルーマニア文語創出の試みが、やがて1840年代までにワラキアの学者 Heliade によって真に近代的なロマンス語としてのルーマニア文語に改革された。ブルガリアでは、ギリシャ語・トルコ語の要素をよりスラブ化する試みが1820—70年代に行われた。(なおチェコ語については George Thomas "Towards a History of Modern Czech Purism: The Problems of Covert Germanisms" *The Slavonic and East European Review*, vol. 74, 1996、スロヴァキア語については David Short "The Use and Abuse of the Language Argument in Mid-Nineteenth-Century 'Czechoslovakism': An Appraisal of a Propaganda Milestone" *The Literature of Nationalism*, pp. 40-65、ブルガリア語については Thomas Henninger "The Greek Layer in the Bulgarian Literary Language; Some Balkan Elements of the Vocabulary during the National Revival" *Slavonic and East European Review*, vol. 68, 1990、またルーマニア語についてはアレクサンドゥル・ニクレスク(伊藤太吾訳)『ルーマニア語史概説』大阪外国語大学学術研究双書10(1993年) pp.148-187を参照にした。)
- (3) 新語主義(neológia)に対抗して、より手を加えない言語(庶民の言語)を重視した一派。他民族の言語改革の例において筆者の知る限り、同様の命名が見いだせないため、訳語はここでは直訳にあたる「正(orto)語(lógia)主義」とした。
- (4) いわゆる近衛兵文士たち(testőrírók)を新時代のはじまりと断定したのは Kazinczy がはじめてだったが、彼は Bessenyei よりむしろ同じフリーメーソン仲間の Báróczi の名を代表に挙げている。Bessenyei をパオニアとみなすのは Toldy Ferenc (*A magyar költészet története*, 1854)の頃からである。
- (5) Szerb Antal, *A magyar irodalomtörténet*, p.205.
- (6) ホルヴァートはこの時代の作家、たとえば Faludi や Mikes の散文、Amadé や Ráday の韻文はカジンツィによって集約されるハンガリー語史上最大の言語・文体改革のはじまりを告げる初來の燕(első fecske)だ、と述べている。(Horváth János, *A magyar irodalom fejlődéstörténete*, p.171.)
- (7) 1777年8月22日に発布されたマリア・テレジアによる学校教育改革令。Ürményi József が委任され書いた方法論、体制整備を包括した教育計画で、ハンガリー教育史上初の総括的で詳細な出版物となった。(Kosáry Domokos, *Művelődés a XVIII. századi Magyarországon*, pp.410-411.)
- (8) また、1746年にウィーンに設立された教育機関テレジアヌムでは中流貴族の子弟に教育の場を与え、1772年までに117名のハンガリー人青年が学び、ドイツ語・フランス語を身につけている。

- (9) これが書かれたのは1781年であるが、その後ベシエニェイはヨーゼフ二世によりウィーン退去を余儀なくされ、ハンガリーに戻っても不安定な生活が続いたことにより、出版の期を逃していた。実際の出版は言語学者であり当時出版の仕事に携わっていたレーヴァイ(Révai Miklós)によって、1790年に匿名でされた。
- (10) Waldapfel József, *Magyar irodalom a felvilágosodás korában*, p.16. またハンガリー・ジャコバン党事件(別名マルティノヴィチ事件)の言語精神生活への影響については、拙稿「初期ナショナリズムにおけるハンガリー語観——二文法家の対立をめぐって」(『比較文化研究』25号、1994年)を参照のこと。
- (11) Kosáry, *op.cit.*, pp.307-308.
- (12) ベシエニェイ、カジンツィとも東北方言およびティサ方言を推奨。当時新教派の学問の中心地でもあったシャーロシュバタクやデブレツェンのコレギウムで話されるハンガリー語をモデルにしようとした。
- (13) 1781年ハンガリー語・独語・ラテン語の三カ国語辞典(Weingand és Kopf szótára)の制作が『マジャル報道』の編集部によってよびかけられた。ベシュトのWeingand és Kopf社が出版を請負い、そのころブダに移転したばかりの大学出版局に印刷を依頼しようとしたが、完全な実現には至らなかった。著者はいまだ不明であるが、おそらくラテン語を専門とするプロテスタント系の学者であったとされる。(Gáldi László, *A magyar szótárírodalom a felvilágosodás korában*, pp.121-123.)
- (14) Benkőによると、ブダの大学出版局における1778—1803年の25年間の出版物1579点のうち、192点がハンガリー語のものであった。(Benkő Loránd, “Sághy Ferenc szerepe a felvilágosodás korának nyelvi mozgalmában,” *Nyelvtudományi Értekezések* 113. sz., p. 54.)
- (15) 正式には、*Magyar Grammatika*, melyet készített Debreczenbenn egy magyar társaságで、ウィーンの『マジャル報道』の費用により、1795年ウィーンで出版された。デブレツェンの委員会によって公募・選定された5つの文法書から編纂されてできた。その5つの文法書のうち、Gyarmathi Sámuelの*Okoskodva tanító magyar nyelvmester*(1794)とFöldi Jánosの*Magyar Grammatika*(1912)の2つが単独で世に現れた。Földiは考え方としては新語派に属し、新語創作の方法論についても触れているが、「デブレツェン文法」編集部にはその文法の構成・まとめ方が評価された。
- (16) 「yとjの争い」(ypszilonista-jottista háború)と呼ばれた。ヴェルシェギは発音に忠実な正書法を主張してyによる統一を試みたのに対し、レーヴァイは分析的表記に基づいて動詞の人称変化や所有人称接尾辞にjを採用した。
- (17) Velleditsによると、言語は純粹に人間が創造したもので、歴史の発展とともに言語も発展し、完成へと近づくと考えた点では、アーデルングとヴェルシェギは同じ言語観をもっているが、ヴェルシェギが今日の庶民の話す言語を研究対象にするべきとしたのに対し、アーデルングは現在の言語、それも庶民のそれではだめで、教養人のことばを研究しなければならない、とした。なぜなら、アーデルングによれば、庶民の知性は新しい概念を受け入れにくく、言語は教養社会においてのみ発展するからである。(Velledits Lajos, *Révai és Adelung*, pp.304-305)
- (18) Tolnai Vilmos, *A nyelvújítás*, pp.96-97
- (19) Ibid., p.105.
- (20) Tövises és virágok. *Kazinczy Ferenc összes művei* I. köt. pp. 35-69.
- (21) 題名Mondolatじたい、言語改革によって生まれた語で、今日のハンガリー語では使われていない。この冊子の巻末に収録された辞書にもMondolatの見出し語があり、Oratio [beszéd]と記されている。ここでは新語派に対する文句や皮肉といったニュアンスをもたせようと「物言い」と訳した。
- (22) *A magyar nyelvújítás antológiája*, p.25.
- (23) Balassa József, Bevezetés a Mondolat 1898-as kiadásához. *A magyar nyelvújítás antológiája*, p.26.
- (24) *A magyar nyelvújítás antológiája*, p.92.
- (25) 雑誌『エルデー・ムゼウム』(Erdélyi Múzeum)の編集者。カジンツィの協力によって1814年に刊行された。
- (26) 二人とも新語派を批判した。シャーギ(Sághy Ferenc)はブダの大学出版局の所長であり、正語派の代表

格ヴェルシェギを献身的に支え、彼の死後その著作を出版した。

- (27) *Kölcsey Ferenc levelezése*, p.58.
- (28) カジンツィはこの頃デブレンティに宛てた手紙で「(出版したことについて) 私が間違いを犯したのであれ君が間違っているものであれ、もうこのことはおしまいにしよう。」と書き、批判を軽く受け流している。また、ケルチェイとの間の議論についても「君もつまりのところ理論においては少なくとも我々の味方なのだから、私はそれで満足だ」と述べている。(*Kazinczy levelei*, p.464)
- (29) *Kölcsey Ferenc levelezése*, p.59.
- (30) ハンガリーにおけるフィン・ウゴル言語学の創始者となったシャイノヴィチの *Demonstratio* 出版(1770年)に際し、彼を揶揄する有名な風刺詩を書いたのも Orczy Lőrinc や Bartsay Ábrahám などの啓蒙期の幕開けを担った啓蒙主義的文人たちであった。
- (31) *Kölcsey Ferenc levelezése*, p.60.
- (32) Tolnai, *op.cit.*, p.137.
- (33) Pásztor は18世紀末から世紀転換期にかけては、egy(数詞の1)の綴り方にも少なくとも7通りの記述がみられる、と述べている。すなわち、① egy(Révai), ② egyy(Kazinczy), ③ egygy(Baróti), ④ egy'(同じくBaróti), ⑤ edgy(Földi), ⑥ égy(Gyarmathi), ⑦ edj(Beregszászi) [カッコ内は用いた個人の名]。(Pásztor Emil, "Kazinczy Ferenc és a magyar helyesírás," *Tanulmányok a magyar nyelvtudomány történetének témaköréből*, pp. 520-524.)
- (34) 18世紀末の正書法は大きく分けてカトリック式とプロテスタント式が支配的で、実際はこの二つの正書法をごちゃまぜに使っていた。1832年にはじめて統一された正書法では、カジンツィが好んでいたレーヴァイの方式が採用された。すなわち、cs を cs、c を cz と記述するところはカトリック式、語尾変化における j か y かの問題では、ヴェルシェギの主張する発音表記を重視した y ではなく、レーヴァイの分析的表記の j を採用した。
- (35) Németh Béla, "A századvégi nyelvőr-vitához," *Dolgozatok a magyar irodalmi nyelv és stílus történetéből*, p.230.
- (36) Nyelvőr という語自体ドイツ語的な語構成で(Sprachwarte)、ハンガリー語らしからぬのではないかと、という意見もあった。Németh は正しくは Magyar Nyelv Óre であり、Nyelvőr の語は難解な感じがすると述べているが、Tolnaiはこの語はハンガリー語の語構成にそむくものとはいえない、としている。Volf は雑誌の創刊号でこの命名について、明らかにドイツ語的で、間違った類推による造語であるとし、雑誌はすでにその題に、これから戦うことになる敵を掲げているとしている (*Magyar Nyelvőr*, I.köt. I. füzet., pp.13-17. また、Volf 自身は題の決定に関与しなかったと思われる)。ここでは、この語が造語であることを考慮し、意識として語感の近い翻訳を筆者が試みた。
- (37) *Magyar Nyelvőr*, I. köt. I. füzet. p. 1, "Mit akarunk?"の冒頭部分。
- (38) トルディは、ブガートの語彙創作の理論に批判を加えた翌年、独ハ学術専門用語辞典(*Német-Magyar Tudományos Műszótár*, 1858)を出したが、これは当時の学術用語から外来語を一掃し、すべての用語をハンガリー語に置き換えたものだった。そのハンガリー語純粹主義にはブガートのような理論的大胆さはなくとも、構想の規模といい、詳細さといい、もっともラディカルな新語主義の結晶といえるほどであった。また、フォガラシは、ツツォルと共同で6巻本のハンガリー語辞書(*Fogarasi János-Czuczor Gergely, A magyar nyelv szótára 1862-74*)を出版した。
- (39) Németh Béla, *op.cit.*, p.234.
- (40) *Ibid.*, p.235.
- (41) *Magyar Nyelvőr*, III. köt. 2. füzet.
- (42) 1875年3月15日アカデミーで読み上げられ、同年 *Az új magyar orthologia* の題で出版された。
- (43) Toldy Ferenc, *Az új magyar orthologia*, pp. 25-26.
- (44) *Ibid.*, p.28.
- (45) 特に安価な大衆紙として人気のあった『日曜新聞』(*Vasárnapi Újság*, 1854年刊行)は言語論争を積極

的に取り上げた。紙面では新正語派のサルヴァシュやヴォルフと新語派のバルラギが激しく対立し、そこに両派の調停を試みる人文学者のイムレ(Imre Sándor)やブラッシャイ(Brassai Sámuel)の寄稿が掲載された。しかし、調停の努力は両派によって一蹴され、簡単には実現しなかった。

(46) Tolnai, *op.cit.*, pp.196-197.

(47) Szily はこの辞書に約一万三千の見出し語をもうけている。

参考文献

- Benkő Loránd, *A magyar irodalmi írásbeliség a felvilágosodás korának első szakaszában*. Bp., 1960.
- , "Sághy Ferenc szerepe a felvilágosodás korának nyelvi mozgalmában," *Nyelvtudományi Értekezések* 113. sz.1982.
- Biró Ferenc, *A felvilágosodás korának magyar irodalma*. Bp., 1994. Második kiad. 1995.
- Fodor Irén (összeállította), *A magyar nyelvújítás antológiája*. Kolozsvár, 1995.
- Gáldi László, *A magyar szótárírodalom a felvilágosodás korában és a reformkorban*. Bp., 1957.
- Horváth János, *A magyar irodalom fejlődéstörténete*. Bp., 1976. Második kiad. 1980.
- Kiss Jenő-Szűts László(szerk.), *Tanulmányok a magyar nyelvtudomány történetének témaköréből*. Bp., 1991.
- Kosáry Domokos, *Művelődés a XVIII. századi Magyarországon*. Bp., 1980. Harmadik kiegészített kiad. 1996.
- Magyar Nyelvőr*. I-III köt. Bp. 1872-74.
- Német Béla, "A századvégi nyelvőr-vitához." *Dolgozatok a magyar irodalmi nyelv és stílus történetéből*. (szerk.) Pais D. Bp., 1960.
- Pynsent, Robert B. (ed.), *The Literature of Nationalism. Essays on East European Identity*. London: Macmillan, 1996.
- Szabó Zoltán (rendezte), *Kölcsey Ferenc levelezése*. Bp., 1990.
- Szalai Anna (összeállította), *Pennahaborúk. Nyelvi és irodalmi viták 1781-1826*. Bp., 1980.
- Szauder Mária (szerk.), *Kazinczy Ferenc. Levelek*. Bp., 1979.
- Szerb Antal, *Magyar irodalomtörténet*. Kolozsvár, 1934. Nyolcadik kiad. 1986.
- Szily Kálmán, *Adalékok a magyar nyelv és irodalom történetéhez*. Bp., 1898.
- , *A magyar nyelvújítás szótára*. Bp., 1902-1908., reprint kiad. 1994.
- Taxner-Tóth Ernő, *Kazinczy és kora (1750-1817)*. Kiadta a Petőfi Irodalmi Múzeum. 1987.
- Toldy Ferenc, *Az új magyar orthologia*. Bp., 1875.
- Tolnai Vilmos, *A nyelvújítás*. A Magyar Tudomány Kézikönyve II. köt. 12. füzet. Bp., 1929.
- Velledits Lajos, *Réxi és Adelung*. Bp., 1908.
- Waldapfel József, *Magyar irodalom a felvilágosodás korában*. Bp., 1954. Harmadik kiad. 1963.
- Z. Szabó László, *Kazinczy Ferenc*. Bp., 1984.
- 福田喜之助 「ドイツ語史から見た外来語の研究」朝日出版社、1970年
- ヘルダー、J.G. (大阪大学ドイツ近代文学研究会訳)「言語起源論」法政大学出版局、1972年
- ルソー、(小林善彦訳)「言語起源論」現代思潮社、1970年

(1997.9.5 受理)